

中山神社の太鼓（なかやまじんじャのたいこ）

この太鼓は櫂の一木造りで、直径 60 cm、長さ 41.5 cm、重さ約 17.6 kgをはかります。胴の内面に 6 種類の紀年銘のある墨書がみられ、最古のものは嘉慶 2 年（1388）福田村の浄阿ミが願主となり、大篠の材木を用いて制作したというものです。その後の紀年銘はいずれも江戸時代のもので、寛文から文政まで少なくとも 5 回の修復のあったことが記されています。



また、年代ごとに太鼓職人の集住地であった京都や大坂の地名や太鼓職人の名前がみられ、張替えの変遷を詳細に伺い知ることができます。

本太鼓より確実に年代の遡る紀年銘のある太鼓としては、兵庫県加東市朝光寺（永仁 6 年（1298））や、奈良県吉野町金峯山寺（徳治 3 年（1308））があります。中山神社の太鼓は、これらに次いで古い年号のある太鼓であり、全国的にも古く位置づけられるものです。（平成 25 年 4 月 23 日指定）

徳守神社の鉄盾（とくもりじんじャのてつたて）

徳守神社の鉄盾は、森忠政が大坂の陣の後に奉納したと伝えられる一対の鉄盾です。

『徳川実紀』によれば、大坂の陣では、攻め手の大名の多くが竹束を弾よけとして利用していたため、激しい銃撃には対応できず多数の負傷者が出ていました。そのため、慶長 19 年（1614）11 月、今橋を攻めていた池田忠継に鉄盾が与えられました。また、同年 12 月には惣構えの堀際で銃撃にさらされている諸大名に対して、鉄盾十張ずつが授けられた旨の記述があります。



この頃、森忠政は、池田忠継とともに天満から仙波に陣替えとなり、今福（今橋の誤りか）口を攻めていました。『大坂冬の陣図』『大坂夏の陣図』には、鉄盾は見あたりませんが、『徳川実紀』などの記録の存在と、弾痕と思われる数多くの傷が残る鉄盾の様子からは、徳守神社に伝わる伝承の正しさが推測されます。

現在、類似の鉄盾は、岡山県下では足守の木下家伝来と伝えられる鉄盾一対が確認されるのみで、木下家伝来の鉄盾も大坂夏の陣で使用したものと伝えられています。

この鉄盾は、津山藩初代藩主森忠政ゆかりの資料であると同時に、大坂の陣に関連した貴重な歴史資料ということが出来ます。（平成 26 年 9 月 25 日指定）